

第20回 学生フォーラム

令和2年12月12日(土) 13:00~17:30

※学生フォーラムでは、岡崎市内7大学の学生が、地域と結びついた様々な活動（ゼミ、サークル等）の成果について、発表・展示を行いました。そこで
の発表内容を報告いたします。

【学生フォーラム】

就学前教育についての日本とドイツにおける比較考察

岡崎女子短期大学 堀内美江

要 旨

日本とドイツの就学前教育に焦点を当てて、両国の幼児教育の現状を比較する時、幼児期の特性を生かした教育や、就学前までに育てたい子どもの姿を中心に、国から統一した要領や指針が出されている日本に対し、ドイツでは、園の独自性を保ちつつ、多様性社会で生きる力を身に付ける態度に注視し、就学機関との連携を重視するなど、日本とは違う、幼児教育の考え方が見えてくる。ドイツとの就学前教育についての比較考察を通し、日本の幼児教育の特徴と課題を考えてみたい。

1. 研究の目的

ドイツ語講師という社会人時代のキャリアを生かし、はじめに、日本とドイツの就学前教育の特徴を明らかにしながら、ドイツの幼児教育の現状を眺めたい。また、日本の幼児教育の現状とドイツのそれを比較し、特に両国の就学前教育に焦点を絞って、共通点や相違点を考察する。そのなかで、日本の幼児教育の、世界における立ち位置といったもの、その長所や今後の課題などが見えてくるのではないかと考えている。

2. 日本とドイツの就学前教育

日本もドイツも、第二次大戦の敗戦国であり、戦後の高度経済成長を経て、先進国となった。ドイツの教育家フリードリヒ・フレーベルの幼児教育理念やその方法は、アメリカ経由ではあったものの、日本の幼児教育の現場に早くから取り入れられ、現在の保育施設の基礎となった。このように、古くから幼児教育の分野で日本とドイツはつながっていた。

しかし現在、幼児教育や子どもの育ちの様相は、両国ではかなり異なる。就学前教育の



岡崎市細川小学校HP : <http://www.oklab.ed.jp/weblog/hosokawa/2010/04/post-102.html>
最終アクセス 2020/12/09

ドイツの入学式「地球はとっても丸い」
<https://chikyumaru.net/wp/?p=2005>
最終アクセス 2020/12/09

考え方をよく現しているのが、入学式の光景だ。静かに椅子に座り、話を聞く日本の子どもたち。ドイツでは、子どもたちは普段着で入学式に参加し、プレゼントが詰められた“シュールトゥーテ”を手に笑顔で過ごす。日独それぞれの就学前教育がどのような到達点に向けて考えられているのか、下の写真からもイメージできるのではないかな。

3. ドイツの就学前教育の課題

しかしドイツでは、このような素朴な幼児の姿に対して、大きな議論が起こっている。きっかけは2000年のPISA「国際学習到達度調査」で、ドイツの子どもの学力が急落したことだった¹。また幼児教育とその後の就労や収入との関係が論証され、現在、幼児教育の重要性が世界的に見直されてもいる²。ドイツの幼児教育は、このような危機感と世界的な流れのなかにある。そしてこの危機感と、日本もまた無関係でいることはできないだろう。

4. 就学前教育についての日独比較

(1) 就学前教育の現状

日本では2017年、施設形態を超えた就学前教育の共通方針が国から出され、どの施設でも同じ教育の方向性が保たれるよう示された³。一方ドイツでは2004年に国からの枠組が示されてはいるが⁴、そこでは園の独自性を重視することも、強調されている。

就園率を見てみると、日本と同様にドイツでも95%を超える高水準にある。しかし、移民家族の場合、就園率が80%に落ちるなど、日本とは違った文化的特徴も見られるようだ。

(2) 「育ちの原則」から見た日独比較

現在日本では「幼児教育において育みたい資質・能力」の3つの柱が示され、周囲の環境と関わり、遊びに没頭し、体験を重ねることが、就学後の学習意欲や態度につながると考えられている。一方ドイツでは学習のコツや技術を育てることがうたわれ、同時に多様な背景や特性を持つ子どもに対して、教育的示唆や配慮が求められているのが特徴的だ。

つまり日本では、就学後の学習とは異なる、幼児期特有の教育という考え方が根底にある。他方ドイツでは、幼児教育はあくまで小学校での学習を見据えたものであり、そのなかで子どもの置かれた多様な状況を、複眼的に捉えようとしているように思われる。

(3) 就学前教育の「子どもの姿」

また「就学前までに育ってほしい子どもの姿」も、日本では国から示されている。いわゆる「10の姿」は保育者らにとって、求められる教育や育ちの重点を具体的に知る「指標」と言えるだろう。他方ドイツでは、具体的な姿が提示される代わりに、幼小「連携」が就学前教育で最も重視されているようだ。特に「5歳児」の学年が就学準備期間として位置付けられ、一年間という時間をかけてその「連携」が考慮されているのは興味深い。

6. 今後の展望と課題

幼児期特有の子ども理解を基にした日本の教育理念は、日本の幼児教育の重要な立ち位置であり、大きな特徴だと考える。一方で、子どもやその生活環境の多様性と教育形態の自由を重視する視点は、ドイツ独自の姿勢として興味深い。

このように、就学前教育の国際比較は、今後も日本の幼児教育の客観的な評価や考察の有効な手段となり続けるだろうし、新たな課題を見つける一助ともなるのではないかな。

¹ 大高泉／遠藤優介「ドイツにおけるPISAショック後の教育政策と科学カリキュラム改革」『日本

科学教育学会年会論文集 Vol. 36』, 国立研究開発法人科学技術振興機構, 2012, 139-142 頁

² James Joseph Heckman: *Giving Kids a Fair Chance: A Strategy that Works*, MIT Press, 2013

³ 文部科学省 『幼稚園教育要領』 フレーベル, 2017

⁴ JMK/KMK: *Gemeinsamer Rahmen der Länder für die frühe Bildung in Kindertageseinrichtungen*, 2004